

巻頭エッセイ

遙かに見たナイル

日高敏隆

ナイル・エチオピア学会の会員でありながら、
はくはナイルもエチオピアも知らない。ナイルを
見たのは一度だけ、もう5年以上前になるが、ナ
イロビのICPIPE（国際昆虫生理生態学センター）
からの帰りだった。

一週間ほどつづくICPIPE理事会のハードな会議
がすんで、当時の所長トム・オディアンボの豪邸
でのパーティー。夜も次第に更けてきて、理事会
のメンバーは帰国のため2人、3人と帰りはじめ
る。

はくも23時何分だったかの飛行機に間に合うべ
く、オディアンボ家を後にした。市内のホテルへ
寄って荷物をとり、ジョモ・ケニヤッタ空港へ向
かう。空港にはもう他の理事たちが到着してお
り、エール・フランス、ブリティッシュ・エア、ア
リタリアなど、それぞれの便にチェック・インを
している。

はくはいつもエール・フランスに乗るのだが、
このときはヨーロッパの飛行機はすべて満席で、
やむなくケニア航空でパリに向かうことになっ
ていた。チェック・イン・カウンターへいったら、
飛行機はまだついていない、もう少し待て、とい
う。いろいろ聞いてみると、明朝4時頃になるそ
うな。しかしホテルに戻っているだけの時間もな
い。結局、空港のなかで仮眠することになった。
送って来てくれたオランダ人理事に、"poor man!"
といわれ、本当にpoorな気分になって空港に入っ
た。

飛行機が着いたのは朝5時頃だったろうか。出
発は6時過ぎ、おまけにモンバサ経由だった。ナ
イロビからいったん西南へ向けてモンバサにい
き、それからヨーロッパへ向かう。パリからの乗

り継ぎなどもう絶望である。

天候は快晴だった。いつも夜にしか飛ばないア
フリカの大地がくっきり見えた。そのうちに、砂
漠の中を流れる大きな河が目に入った。「ナイル
だ！」はくは歓喜の声をあげた。

えんえんと広がる砂漠。その中をどこまでも流
れていくナイル。この広大な砂に吸い込まれてし
まうこともなく、驚くべく豊かな水量というほか
にない。地図がなかったの、どちらが白ナイル
でどちらが青ナイルだったか自信がなかったが、
やがてふたつのナイルが合流した。そしてまた流
れていく。晴れているので河のへりもはっきり見
える。水は一見乾き切った砂と接して流れてい
る。黒く混ざった川岸などは見当たらない。不
思議だった。

右手遠くに望む山地はエチオピアだろうか？か
つて一度飛んだことのある山国。眼下には砂漠と
ナイル。はくは昔から聞いているナイル文明とエ
チオピア文化のことを思った。

しかしはくが通ったときのエチオピアは悲惨と
しかいえなかった。アジス・アベバの空港で飛行
機から降りることも許されず、暑さに耐えたメン
ギスツ時代のエチオピア。コプトの文化はどこに
いったしまったのだろうか、悲しかった。

今、再び遙かにエチオピアの山々を望みな
がら、ナイルの上を飛んでいると、この土地への思
いが膨らんでくる。一度でいいから、この憧れの
地に行ってみたい。そのうちに雲が多くなって
いた。雲が切れたとき、飛行機はもう地中海の上
だった。

（ひだか としたか 滋賀県立大学
日本ナイル・エチオピア学会顧問）